

散一多流さし散敷一退柵さん威勢を傲ま柴田佐久間も秩率小指
 揮ひ一多流二之方散行やいな擋面の面々遣推把敵陣當的の塞一
 門地小面も振らむ沖莞る氣孫方も方らむと全く進んで槍を合せ
 七槍途と防戦ひ鋒をせ散らむ謀合より然ども英濃勢大軍をま
 尾張勢の二千余騎せ正心小知れ單々刺さむ殿人と悉け柴田佐久
 間小勢をまどもの何をも所を極勇壯り二をこ小次柵さんと豈
 と相く様となく集散用合鋒の徹らんを小戦ふら牧村野木の支
 將の頑て行中重治が謀を領しむ六時分なりと拒抗さぬて故意百次
 小頼起右頼左例小教乳を柴田佐久間の得るや得ると勝小系て退
 蕨けまむ秋孫方の起時なく加納村まで逃散ら織田勢いよく構ひ
 極く奥叫んで遂性とる本加納の御中より竹中半兵衛重治三千余騎

小て顯出始々此小速へり柴田播六佐久間右出つ牧村野木三千余
 騎より次潰し勢起る勢をまむ竹中半兵衛が子孫勢を層とも
 思ふこそ一戦小蹴散ら龍奥の陣小次招らんと極虎の像く激
 叫するに遂小竹中が三千余騎を妙煙と一呼小一時小颯とりの山明を厥
 る捷らると柴田權六正魁小進んで羅をく敵の逃るがむり流る源
 ぶと逐行て林中を逐る是れと敵を形頼を視放まむ敵を地へ
 逃らけん百歩計も隔てし岡小龍奥の旗馬標風小靡きて翻転ら柴田
 親より武者揮ひ彼も當的敵陣をぞ若や蕨と馬小拍銃小進む
 既途を。自他も小勢と相。練て強む後脊少の雲を流し像は敵の報
 不ぞ生と斬寒き。鯨小せんと推捕圍る牧村野木の三千余騎竹中が
 隊位と一纏小る。四千有余騎正圍小圍をせはらる攻蕨る得の柴田

豊臣記二編卷之一

十三